

## 佐野長寛作 龍鳳凰漆絵蒔絵食籠

口径一九・七釐 総高一五・二釐

嘉永年製（一八四八―五三）

京都国立博物館蔵

我が京都国立博物館が、漆芸作品のみを集めて展観したのは「漆工長寛遺作品」展が嚆矢であるらしい。大正十四年四月三日のことである。わずか五日間だけの展示であつたが、展観終了後、長寛追薦会により『漆匠長寛』と題する遺作図版集（B4版）が刊行（六月十日発行）されている。

まず、その緒言の全文を掲載する。この食籠の作者、佐野長寛の為人、造形態度などが簡潔にして、総括される文章と推察するからである。

### 「緒言」

近代の鉅匠佐野長寛は、京都新町通三條上ル塗師長濱屋治兵衛の次男にして、寛政六年に生れ幼名を治助といふ、慧敏尋常にあらず十二三歳にして既に大志を立てて父を驚かす、文化十一年二十二歳にして父を喪ひ其名を襲ぐや、飄然出でて四方を周遊する事八年、其間富豪を歴訪して秘什を觀、名工に會見して技法を闘はし具に研鑽を重ね、京都に歸るや號を選んで長寛と爲す、蓋高麗の張寛に私淑せる乎。

性恬淡寡慾にして交を好まず、弊衣蓬髮人に耻づるなし、米塩乏しきを告ぐるか、意の向ふかに在らざれば決して髣髴に従はず、悠悠自適細君と和歌を應酬し茗を煎じて娛しむ、而も偶々作る所は悉く

佳品ならざるなく、好事の士争ひ得て珍重す、洵に藝術家の典型たり、安政三年三月六十三歳にして歿す。

長寛逝いて七十年嗣絶えて祀るものなし、有志之を遺憾とし今年二月二十四日其宿坊浄宗寺に法要を修し、又同好者相謀り四月三日妙法院に追薦の法筵を設け、別に京都博物館に名家秘蔵の遺作を陳列する事五日間、以て長寛の妙技を偲びたり。陳列を閉づるに及び、他日再び斯る多數の名器を觀るの機の到らざるを思ひ、其一部を抜きて撮影し以て之が紀念となす、本書則ち是なり。

大正十四年五月

編者識

この編者が誰であつたか未詳であるが、林新助、西村素吉、野口安左衛門、大原孫三郎、野村徳七、今井貞次郎など二十一名の作品所蔵者が四十九件の遺品を図版掲載している。これらは緒言にもあるようにこの展観の抜粹である。展観の一部が図版化されたにすぎない。しかし、この四十九件の器種をみると、(一)茶入・棗・香合・水指・菓子盆などの茶道具、(二)椀・食籠・重箱・盃などの飲食器が主で、特異なものとしては、祇園祭常明山の宇治橋などが掲げられる。また、これらの技法・意匠は塗りの技法を生じたものが主で、蒔絵・漆絵で施こされた意匠は伝統的な我が国の自然・草花、また中国にその範を置く意匠とに大別される。

この食籠の意匠は典型的な後者に属するものである。だが、この展観に出品されたものは明らかでない。すくなくとも『漆匠長寛』の図版には掲載されていない。しかし、蔵品台帳によれば恩賜京都博物館より京都国立博物館に変わる昭和三十年、東京国立博物館から管理換え（当時は下賜されたと表現する）されたもの一つであり、外箱貼紙によれば、藤原忠一郎氏が展観当時に寄贈したものと知られ

る。

——作品 龍鳳凰漆絵蒔絵食籠——

食籠の形容は円形、やや外に反をみた口縁、ゆったりとした胴張をみせて上げ底、蓋は盃形、落し蓋形式。総体黒漆塗。(一)蓋表は金・銀・青金の平蒔絵と朱・紅柄の彩漆で一双の鳳凰と瑞雲を配す。また高台内には二重輪の内に「嘉永歳製」の金蒔絵銘を記す。さらに蓋裏には朱漆丸内に金平蒔絵で「富」字を隷書で意匠する。(二)身は外面を同じく瑞雲と一双の龍、身込にも同じく「貴」字を配している。また身底には同じく二重輪内に金平蒔絵で「長寛造」と朱印があり、その周囲に花卉様を連続して描いている。(三)黒漆塗外箱には白木の底に次の墨書銘がある。「色絵 砂金囊 蓋物 鳳龍之繪様 萬曆時代 漆匠 長寛造(朱印)」。(挿図1)



挿図1 「外箱底部・墨書銘」

(四)この食籠は砂金囊と銘名されている。胴から尻にかけてゆつたりとした丸味と落し蓋形式と蓋高台の形からの命名であろう。「富貴」の文字もこれに掛けた意匠であり、

多分に茶道具としての命名と推察出来るし、多分に京焼との関連によるものである。(五)意匠の瑞雲・鳳凰・龍は箱書にあるように中国明時代万曆期にその範を置いている。旋回して配される鳳凰、連続して描かれた双龍、そこには瑞雲が飛ぶ。また器底の花卉様はこの場合、雲龍意匠に配される山岳・靈山を意識しても施こされいると考えざるを得ない。明らかに中国明時代の陶磁器・染織品・漆工芸の吉祥文を模して製作されたものである。(六)ただ、やはり作者長寛は自ら漆匠と称するように塗師である。その意匠・技法の範は中国漆芸品にあらねばならない。それは明らかに万曆期の存星の技法にその基をおいている。存星は朱・紅柄・緑・黄などの彩漆で文様を描き、その輪郭を沈金(鎗金)で縁取るといふ明代に隆盛を極めた漆芸技法である。この期の存星に於ては雲龍文様はその代表的意匠である。しかし、長寛はこれらの中国的要素を巧に吸収しながら、日本人好みの中国趣味として、それを組み変え、独自の世界を創造している。即ち、器胎全体を黒漆塗とし、存星にみられる細緻な地文を排して黒一色のすっきりとしたものにし、朱・紅柄の彩漆と、金・銀・青金の平蒔絵でうまく存星の気分を表現している。それらは金平蒔絵の縁取、あるいは漆絵・蒔絵に於る針描・描割技法による表現効果にある。長寛の独創によるものであろう。さらに、意匠的な観点に立てば存星に見られる器面全体を地文と文様で埋めつくせずにはおかない意匠を整理し、日本人好みの空間をいかした簡潔な意匠化を計っていることがある。それは山岳・靈山を花卉様に表わし、富貴の文字を蓋裏・身込に分散して配したところなどに顕著に表われている。また、細かな部分的なことをいえば龍の爪は四本で、中国的吉祥文である五爪の龍とは一步退いたものになっている。

さらに蓋高台内の「嘉永歳製」四文字は中国官營工房作品の銘、例えば「大明萬曆年製」等を模したもので、中国漆芸品の影響化の創造であることを暗示させている。このことは後述する玉楮象谷などの作品と共通するものである。と考えるとこのような中国漆芸写し、あるいは中国趣味というものは、この時期の一つの流行であったと言えるのである。(七)この食籠はただ単に一品作品として製作されたものでない事が知られる。一対、あるいは一組、あるいは数点絵替の作品として製作されたことが類例によつてわかる。例えば「唐花漆絵時給食籠」(京都個人蔵)がそれで同形・同技法にして靈芝・牡丹風唐草を蓋・身に表わし、「富貴」の飾り文字も同位置に配されている。また、「嘉永歳製」の銘「長寛造(印)」も同じである。さらに外箱底部には墨書銘で「色繪 砂金囊 蓋物 萬曆時代之繪様 靈之唐草 漆匠 長寛造(印)」と記され、同一時期、同一意識で製作されたことが知れる。この様式で幾つか造られたものと推測される。

——作者 佐野長寛——

佐野長寛は寛政六年(二七九四)に長浜屋治兵衛の次男として生を受け、安政三年(一八五六)三月二日に没している。享年六十三才。その事歴は『工藝鏡』<sup>注3</sup>、『古今漆工通覽』<sup>注4</sup>、『時給師塗師両工伝』<sup>注5</sup>あるいははじめに引用した『漆匠長寛』<sup>注6</sup>辺を基本に辿るほかなさそうである。しかし、その他、幕末から明治・大正期にかけての若干の資料があるので、これらを総括して長寛なる作家の生涯を追つてみたい。

佐野長寛、通称長浜屋治助。寛政六年長浜屋治兵衛の次男として京に生る。幼名治助、幼少の頃から才たけ、読み書きを習い、和歌をよくしたという。文化十一年頃父を喪い、其名を襲ぐ。この後、

諸国の工房、名工、あるいは富豪秘蔵の名品を求めて遍歴。技術の研鑽と審美眼を養う。根来・吉野・江戸などを廻つたらしい。特に江戸に於ては幕府御用時給師の用いる紫漆の法を問うに教授されず、大変口惜く思い、多年研究して終に自ら其法を發明したりという。文政八年、三十才過ぎにして京都新町三条の家に帰り、閉居し、頭髮を櫛けらず、鬚髯をそらず、弊衣をまとい、常に新意匠のものをつくり出さんことに勉め、号を長寛と為す。長寛の号は私淑した高麗の名工張寛からのもので、自から張寛五代の末と称した。

このような生活ながら悠々自適、妻と和歌を応酬し、茶を煎て娛しむというものであつたらしい。しかし、たまたま作るその作品は悉く佳品であり、好事の士は争うて求めて珍重したという。ただし、意に適さないものは千金を積まれても製作しなかつたともいう。安政三年三月二日没、法号釈休専。

以上記したが、わずかに百三十年前に没した幕末の工人にしては、多分に不透明な部分が多い。明治期の工人略伝を基に以後、それのみ引用し、孫引した結果がこれである。誤記誤引もあると推測出来るし、その新たな研究がなされなかつたのが最大の原因である。その著明な事例に没年の問題がある。『工藝鏡』以下の略伝はすべて「文久三年某月、年七十三」とある。これを訂正明記したのは『漆工長寛』の緒言であり、その根拠を掲載の「長寛画像賛」によつていられる。これも後述する。

さて、この長寛の略伝に挿入出来得る事歴を若干書き入れ、長寛なる工人の研究の一助となればと願う。

(一) 天保五年(一八三四)、石水清八幡宮に源太産衣げんたうぶぎの鎧の櫃奉納の事。宝暦元年(一七五二)の大地震により石水清八幡宮橋本坊に神蔵

されていた源義家の源太産衣の鎧が焼失。これを憂いた大塩平八郎（二七九三―一八三七）が、長寛、長浜屋治兵衛父子に依頼して朱漆塗の唐櫃を製作して奉納している。唐櫃の底には長文の蒔絵銘<sup>注7</sup>があり、長寛四十一才の事歴と知れる。堅牢な造りで洗朱塗。銘の読みは中央「鎮守府將軍源義家朝臣……」から始まるもので、パズルの興味

挿図2 「唐櫃底部蒔絵銘」

をもたせる記銘である（挿図2）。また、この銘文によれば「長浜屋治兵衛」とも名のつたことが知れる。因にこの櫃（当然鎧の焼片と共に）は幕末冷泉為恭が神社より取出し、所々漂流、明治二十五年米穀商高橋次郎の手に入り、氏は落成間近な帝国京都博物館に鎧の焼片と共に寄附せんと『日出新聞』記者に語っている<sup>注8</sup>。

(二) 永楽保全との交りの事。また息宗三郎の事。『日本漆工會雜誌』第二百十七号、大正八年四月に、『塗師佐野長寛』と題して案山子が次のように書いている。「長寛は永楽和全と交りてその情宛かも兄弟の如くであった。その高雅の性が大に契合した為めであろう。長寛の妻の妊める時に、和全その産れたる子は藁の上より取りて子として養はむと約した。やがて分娩するや、未だ其妻の之れを見ざるにも拘らず、自ら抱いて之れを永楽氏に送りて、これこそ眞に藁の上より與ふるものなりと云ふた。」この記事にも実は誤がある。永楽和全とあるが和全ではなく父の保全（二七九五―一八五四）が正しい。保全は長寛より一才年下である。ただこの養子の件は事実で、藁の上（産褥）からはともかく、次男宗三郎が永楽（西村）保全の養子となっている。宗三郎は永楽家に入り名を西村善次郎、号を回全とし、永楽十三代を継ぐ。後に掲げる長寛画像は宗三郎の筆とされ、長寛の略伝からは夫婦のみの暮らしと読みとられる。長男長秀は早世しているのである。ただその詳細は不明。長寛の歿後はその継嗣は絶えたい<sup>注9</sup>。男山八幡宮奉納の唐の銘、父子とあるのは、当時宗三郎は生れたばかりの赤坊なので、長男長秀を示す。それはともかく、永楽保全その子回全（回全の義兄）の茶陶磁器の作風は中国陶磁の写し<sup>注10</sup>が特徴で、交趾・金襴手・染付などの優品を製作している。保全・長寛のこのような緊密な関係からすると、その中国工芸を範として



和風化した作品は交互に影響しあつたとも充分推察出来る。事実、保全の交趾写しには白檀塗りの技法が応用されているとされ、長寛の助言があつた<sup>注10</sup>という。

長寛・次男宗三郎については、山口吉郎兵衛著「西村宗三郎傳」(『日本美術工芸』第三五号)に詳しい。引用する。天保五年(一八三四)生れ、幼名不詳、弘化四年(一八四七)頃保全の養子となつたという。善次郎と称す。嘉永四年十八才で結婚、妻は表具師兼書畫鑑定家武部了幽の長女梅。了幽は御室仁清窯跡の地を購入娘梅名義として善次郎に贈つたと伝えられる。善次郎は保全・和全の蔭の力として西村家を助けたとされる。ここでは陶工善次郎、回全については述べたことを省く。ただ、この宗三郎伝は「自己の作品と雖も精品はすべてこれを善五郎和全の名で発表するなど、生涯を永樂家に捧げて全く蔭の人としての立場に甘んじたのである。これは実父長寛から終身養家のために盡瘁せよと戒められたのを誠實に守つた結果で、名工長寛の子たるの名實を辱しめなかつたものと云えやう。」といひ、またその人為を「宗三郎はその消息文にも見られる如く文雅の人で、さうした時代の苦しい生活をしたにも拘はらず餘暇には風雅の道に遊んで自ら楽んだやうである。詩歌は大綱和尚に學び、その師承は明らかでないが繪畫もよくしたことは、遺存する實父長寛の畫像や大綱和尚の畫像に之を見ることが出来る。また琵琶を好んで弾じ『鶯舌』と銘じた一面の琵琶を愛玩して山代へも携行してゐる。(略)宗三郎の號は法名に見える西園の他に宗範・芳洲・菊洞・石蚓・樂車・寫心庵・閑事庵などの別號があつたことを西村文書によつて知ることが出来る。この内、菊洞の號は嘉永二年八月大綱和尚から授けられたものである。(略)宗三郎も生家の技術を修得して餘技に

漆工を試みたらしく、私藏にその作になる色漆蔦時繪棗(西村家舊藏和全箱書<sup>注11</sup>)がある。(略)夫妻の間には五人の女子を儲けたが、それ／＼他家へ嫁し、男子がなかつたためか西村家は宗三郎の歿後陶業を廢した。」

(三) 長寛画像の事。『漆匠長寛』に宗三郎筆の長寛の肖像が掲載されている。西村素吉氏藏(宗三郎、西村善次郎の縁者か)。菊文様の着物をきて端座する老人の像で、涼やかな目が印象的である。

その讚は「漆匠長寛高麗名匠張寛五代之末葉也 安政三年辰三月二日寿六十三而死 法号釈休専 其男石蚓寫其像請讚 功妙切齋造化切 全機自有一家風 専心成器人皆賞 漆匠高名名不空 前大徳八十五叟大綱」

長寛が高麗の名工張寛の末と称したこと、おそらくその号も長浜屋の長と張を掛けた命名であろう。安政三年三月二日が命日であること、六十三年の生涯であつたこと、法号が休専であること、また画は其男石(前述)、即ち、宗三郎の筆になるもので、請われて、大徳寺第四三五代住持大綱宗彦(二七七〇—一八六〇)が讚をしていることが知られる(挿図3)。

挿図3 「宗三郎筆・長寛画像」

(四) 大綱宗彦の事。大綱は大徳寺第四三五代の住持。安政七年二月十六日、八十九才で示寂。長寛、保全、宗三郎との関係は深かつ

たと推察される。「長寛は太た禪要を悦びて大徳寺の大綱和尚に参した<sup>注12</sup>」「保全が西村家の養子となったのは十三歳ごろだったらしく、その仲介は大綱和尚であったといわれている。大徳寺と千家とは利休以来の間柄であり、保全が西村家に入ったのもおそらく千家を通しての縁であったと思われる<sup>注13</sup>。」「宗三郎はその消息文にもみられる如く文雅の人で(略)詩歌は大綱和尚に学び」「宗三郎の號は法名に見る西園の他(略)、この内、菊洞の號は嘉永二年八月大綱和尚から授けられたものである。(前述)<sup>注14</sup>」このように事歴からも四者の関係は密接で、前記の画讃はそれを象徴するもの一つとされるものである。長寛の和歌もおそらくこの大綱宗彦の影響化から派生するものであろうし、幣衣蓬髪・恬淡寡慾という生活態度も参禅によるものかも知れない。

(五) 嘉永七年銘の極書の事。京都個人蔵の「草花繪替密陀繪椀 十客」の箱書に「黒漆内朱四季草木 締反形色繪椀 十具 右者慶長時代之作 嘉永七歲年在甲寅初冬應需識之 漆匠長寛(花押)」嘉永七年、長寛の晩年六十一才の時の極めである。製作活動のかたわら、これら自分の製作に関連し、興味ある作品には箱書をしたものである(挿図4)。現在知り得る箱書は一点に留まるが、今後の研究により数多く発見される可能性は大である<sup>注15</sup>。

(六) 職人・名人譚の事。天保六年のころか(長寛四十歳ごろ)、今津屋某家に祝いの事のあることを聞き、長寛、吸物椀(源氏蒔絵)を作りて贈る。今津屋は容易に入手出来ない器として大変喜び、祝の座に吸物を盛って並べたが、いざ飲まんとすると蓋がとれない。饗応の後、いかにも不審と長寛に問えば、長寛打笑いて、蓋の糸底に錐で穴をあけ、空気を通して蓋をあけたという。この時一夜を経た吸物

挿図4 「草花繪替密陀繪椀、箱書」

の汁はまだ温気を存していたという。前代未聞の珍事として長寛を尊んだという。穴を元の如く塗り直し、今津屋に渡し、後に「我が老の拙き業も後の世にまた頭はるる時やあらなん」との一首を添えたという。明治十九年この椀が競市に出た時三百円の値がついたと当時の新聞は伝えた<sup>注16</sup>。長寛がある時六角山川町の前川某を訪れると先客があり、漆工の事に及び、その客は眼前の長寛を知らずして、世に長寛は古今の名士というが、自分が見る所ではその技拙く、唯酒のみに沈りて、論ずるにたらずと言った。長寛は之を聞き、すぐに大釜に湯を沸かしめ、客を釜の前に導き、沸き立つ湯の内に自作の扱物椀を入れ、木片で搔廻し、その後これらを取り出して客の前に列べ、さて唯酒のみに耽り、技も拙しと嘲りたまひし長寛は即ち私である。この椀に若し毫髪も亀裂があれば、長寛とも言わず、漆を手にする<sup>注17</sup>ことはなかるうといったという。客は陳謝するのみであったという。以上の二つの話はいかにも江戸時代の職人・名人譚らしい。ただ、いかにも作話めいて長寛の人為には、ややへだたりがあるように思える。次に、諸国行脚から京に帰り門札に「長寛・長



治どちらでもよし」と書き、長寛・長浜屋治助（あるいは治兵衛）どちらでもすきなようにお呼び下さいとの意であったという。また、黒漆塗の盃台に町人風の廻礼者を金時絵で描いたが、袴を着け、脇差を帯びその人物は脇差を右に差して描かれていた。この二つの話は長寛の無頓着さの逸話として伝えられる。<sup>注18</sup>

最後に佐野長寛という作者作風・時代性というものを包括してみたい。

これには、ほとんど同時代に生きた漆工玉楮象谷（一八〇七—一八六九）と比較してみるのが賢明であると私考する。象谷は長寛に遅れること十三年、文化四年の生まれである。四国高松の鞆塗師右衛門の長男。父について鞆塗を習い、書をよくし、彫刻も巧であったという。父は名を洪隆、字を周南、蘭齋と号したなかなかの文化人であったらしい。象谷二十五才にして藩主松平頼恕にみい出され、その注文を製作している。天保六年三十五才、帯刀御免、嘉永六年五十三才、父理右衛門の苗字帯刀御免ということで藩御用の塗師として活躍し、藩主より「讚岐彫・讚岐塗」の名称を与えられている。

作風は塗りを基本におき、中国・東南アジアの漆芸である堆朱・堆黒・紅花緑葉・存星・菊醬などを研究・模倣したのに特徴がある。塗師としての出発・唐物写しの作風は、将に長寛と相い通じるもので、その目ざしたものは同様のものでなかったかとも推察出来る。

事実、象谷と保全との間には書翰の往復があったといひ、象谷・長寛は当然何等かの関連・影響はあったと推察される。ただここで二人の大きな差異というものは、その作家意識・態度というものではないだろうか。象谷の藩・あるいは藩主を背景にもつものと、一介の市井の漆匠として終った長寛のそれとが大きな差となっている。藩

主によって喧伝された象谷の名声、藩注文記録である自筆の「御用留」、あるいは藩資料に残る作品や事歴、これらは象谷の人物・作風をよく現在に伝えている。<sup>注20</sup>これに比べ長寛の人為は幕府御抱え塗師による門前払い的なあしらわれ方、大塩平八郎との石清水八幡宮への唐櫃の奉納、あるいは幣衣蓬髪・恬淡寡欲という生活は、象谷とは全く逆な、権威に対する反抗とも受けとれるのである。市井に生きた長寛としては信ずるものは己のみ、その技法も己のみ、という工人意識であったかも知れない。江戸の漆工を大別すると幕府御抱え工人と、小川破笠、青海勘七、田付寿秀、同栄助などに代表される、放浪・奇行などいかにも破天荒な工人に分けられる。とすると、同じ作域・作風を目ざした、これら幕末の工人二人も、象谷は前者であり、長寛は典型的な後者といえるのではなからうか。

一日、「緒言」にある長寛の宿坊・釜座通突抜町・浄宗寺を訪れたが、同寺の墓所はすべて五条東山の本願寺墓地に移ったとし、一片の長寛に関する資料もなかった。（灰野昭郎）

〈注〉

- 1 『京漆器―近代の美と伝統―』（京都漆器工芸協同組合編集 昭和五八年八月刊）に集録
- 2 大正六年十二月 京都美術倶楽部で開かれた「上京神田氏所蔵品入札」にも、一五一番に「長寛砂金袋蓋物」として同様の作品が掲載されている。因にこの入札には長寛作として、加賀形五組盃（加賀形五ツ組盃 應需募公任卿筆跡 漆匠長寛）墨書がある。・四方菓子器・吸物碗・菜盛碗・片口・弁当・火鉢が掲げられている。
- 3 横井時冬編 明治二七年刊
- 4 高木如水編 明治四五年刊
- 5 風俗絵巻画刊行会編 大正十一年刊
- 6 昭和十七年十月・天佑書房発行の、本山荻舟著『續名人崎人』に「佐

- 野長寛」が書かれているというのが筆者は未見である。
- 7 「鎮守府將軍源義家朝臣一鎧納神庫是源太産衣去今數十歳桃園帝御宇寶曆元辛未八幡郷炎上罹災歸干燼天哉可惜耳爰日洗心堂主人後素人爲奉慰神慮新造作之以神藏行器覆是其漆蒙任誓精淨神心父子謹漆之天保五甲午全奏功成就奉寄進男山八幡宮寶前願主長濱屋治兵衛敬白」  
明治廿五年七月二十日「日出新聞」第二千二百一十一号附録
- 8 山口吉郎兵衛著「西村宗三郎傳」『日本美術工藝』第三五号
- 9 赤沼多佳著「写し、そして個性の表出」『仁阿弥・保全』（日本陶磁全集30 中央公論社 昭和52年10月）
- 10 この裏は現在でも「山口文化会館滴翠美術館」に蔵せられている。  
「塗師佐野長寛」案山子著（『日本漆工会雑誌』二一七号）
- 11 注10に同じ
- 12 注9に同じ
- 13 筆者の古い調査ノートにも長寛の極めのある硯箱が記入されている。  
京都・個人蔵の「萩鹿時絵硯箱」で内箱底部の墨書銘は「萩鹿ノ絵様光悦作描金硯箱 一器 箱書付 家原自仙翁 天保十二歳年在 辛 丑三月 漆部長寛 應需證之（花押）」
- 14 また、京都某家に『漆匠長寛書卷』が伝わり覚として、根来形四ツ足膳二十人前・同三ツ重汁椀・坪平皿二十人前・飯次・湯注・通盆の代金五拾両という、弘化五年二月付の長寛の請求書、あるいは自作の食器類一式をいかに、その収納箱に納めるかの方法を図入で解説した覚もあると聞く。
- 15 「塗師佐野長寛」堆朱楊成著（『日本漆工会雑誌』一四〇号）
- 16 注12に同じ
- 17 同右
- 18 中ノ堂一信著『京都窯芸史』（淡交社刊・昭和五九年七月）
- 19 『玉楮象谷』（玉楮象谷百年祭運営委員会発行・昭和四三年二月刊）
- 20





図版1 龍鳳凰漆絵蒔絵食籠 佐野長寛作 「身側面」



図版2 同 「身側面」



图版4 同「底部」



图版3 同「蓋表」



图版6 同「身見込」



图版5 同「蓋裏」